せたかむい

発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編　纂　室
第三十八号（一日発行）
平成四年十一月一日

北海の鰊場　古平風土物語（四）

安全丸の遭難事故　2

高橋　源五口

座礁した船からは、先端に大きな浮き玉をつけたロープを海中に投げ下ろした。乗組員の救助綱であった。海岸には、消防団の人や、鰊場の若い衆が大勢集まって来た。

その中の屈強な若者五、六人が、白はち巻きにふんどし一本で、早春のまだ凍るような冷たい海に飛び込んでいった。船から投げたロープを拾い上げるためである。

何度も大波をかぶり、波に翻弄されながらも、やっと一人がそのロープをつかみ、それを陸に引き上げることが出来た。

船では、ロープの端を帆柱の高いところに縛りつけ、陸では矢来の上に立っていた太い丸太に縛りつけて、ロープを強く張り渡した。このロープに篭を釣り下げ、それに乗組員を乗せて救助しようというのである。

陸では、鰊のしめ粕を炊く薪をいっぱい集めて来て、何か所にも火をたき、油をかけてどんどん燃やしている。救助した乗組員らや、救助に当たっている人たちを温めようというのである。

波待ちをしながら、船と陸をつないだロープを使っての救出作業が始まった。篭が引き寄せられる途中で大波を受け、人もろ共にあわや海中に転落か、と思われるような場面もしばしばあった。風と波で篭は絶えず揺れ、息をのんで見守る長い時間であった。

決死の救出活動によって、やっとのことで乗組員十数人全員を助け出すことが出来た。

浜に立って、その成り行きを心配しながら見守り、乗組員の無事を祈っていた人たちから、安心したどよめきがあった。

×　×　×

安全丸（百九十九トン）本州から来た船であった。この安全丸の乗組員の中に、親子連れがいた。子どもは十二、三才で、見習であったとか。篭にその親子二人が一緒に乗って渡っている時、篭が大波に叩かれ、「はっ」と思った場面があったが、今でもそのことを思い出す。親子の情愛か、神仏のご加護か、誠に幸運なことであった。

平成元年十一月に『せたかむい』を発刊してから、満三年が過ぎました。原稿や話題の提供と、愛読して下さる方々のおかげで、現在、四百五十部が町内外で読まれております。町史編さんの一助として、これからもご援助下さいますようお願いいたします。

最低　これだけは守れ

蝦夷地の法三条

今から百九十年前

東蝦夷地を治めていた幕府は、『制札』を立てることになったが、何しろ未開の地であり、難しい法令を作ったところでとうてい守れないとして、次のような三か条にした。

一、邪宗門（キリスト教など）に従うもの、外国人に親しむものその　罪重かるべし

二、人を殺したものはみな死罪たるべし

（次ページ下段へ）

町史編さん委員会副委員長
土口野宮雄さんがお亡くなりになりました。
昭和四十一年から町史編さん委員としてご尽力下さいました。心より哀悼の意を表しご冥福をお祈り申し上げます。

古平町史編纂委員会

消えゆく行事に郷愁をおぼえる

『せたかむい』にも、いつか書いたことがあった古平の七夕まつり！　つい最近、ある文芸誌に載っていた七夕の記事を読んでいたら、昔の古平の七夕まつりのことをを思い出した。

「竹に短冊七夕まつりよ、おおいやいやよ、ローソク出せ出せよ、出さねばかっちゃくぞ。おまけにくっつくぞォー。」

この唄は、まだ記憶に新しいである。こうした点から、子どもは文化の創造と変化を担っていると言うこともできるであろう。」と、札幌に生まれたこの作者（俳人）阿部みどり女は言っている。

このようにして、移り伝わったであろう庶民のささやかな文化が、次第に消え去ろうとしているのを惜しむ心情が、私にもよーく伝わって来る。

缶詰の空き缶を横にして、中にローソクを立て、それを針金でつるして作ったちょうちん。また、ボール紙にナスやカボチャ、キウリ、もっこ岩やセタカムイなどを切り抜いて、その裏から色紙を張り、いろいろなちょうちんを工夫して作った。

そうやって作ったちょうちんを持ち、鬼の面をかぶって家々をどなり歩いたものだ。もらうものはローソクだけでは無く、お菓子やお金をくれる家もあった。

そのころ小樽で見た七夕は、高島町から市内まで山車を引く人もいると思うが、古平では、短冊をつるしたのは竹ならぬ柳の木であった。石油の空き缶を叩いては、口々に大声を上げ、町中を歩いたものだ。

「このローソク集めは、本来ねぶたの明かり用に集めていたものが子どもたちの楽しみになり、さまざまにその言葉が変化しながら、北海道をはじめ、青森、秋田、あるいは遠く新潟の佐渡が島などにまで広がったの本格的なお祭りだったのを見て驚いた記憶がある。

いつか水見八郎さんに聞いたら、「面つけて七夕まつり踊りゆく」と、ある有名な俳人が古平の七夕まつりを詠んだ句を紹介してくれた。

「明治は遠くなりにけり」ではなく、「大正も、また遠くなりにけり」である。

北海道にコレラ上陸！

デマといっしょに猛威を振るう

西南戦争の終わった明治十年の九月二十五日、三菱汽船㈱の秋津州丸は、帰還する屯田兵を乗せて横浜から函館へ入港した。ところが二人のコレラ患者を発見、さらに八人の患者が出たことから大騒ぎになり、仮病院に収容したもののたちまち市内にも広がり、数十人の罹病者が出た。そのうち小樽に回航した中からも五人の患者が発生、その後、札幌付近の村でも帰還兵からの罹病者が出て、全道を通じての患者数百二十七人になり、うち死者九十三人を出し、十一月初旬になってようやく終わりを告げたのであった。

これは、本道における最初のコレラ騒ぎであり、当時の人たちはこれをコロリと言っていた。

また、「西郷死して鬼となり、官兵を殺すものである」というデマが飛び、「西郷病」と呼んで当時の人たちは大変に恐れたという。

もっとも医学が進んだ現在でさえ、コレラと言いばその地域の人にとっては恐怖である。

昔から本道に住み着いていたアイヌ人が急激に減ったのも、ひとつには、コレラなどのような伝染病がその原因であった、と言う研究者もいる。

（前ページより）

三、人を傷つけ、又は盗みをした者は、それに応じてとがあるべし

熱気にあふれた決起大会

尾山　清

推進同志会には、若さと情熱はあったものの、全くの無一文からのスタートでした。当時のそれぞれの経済状態から推してみて、入会金とか会費などを徴収できるような状態ではなかったのです。また、金を使って活動するという時代ではなく、今でいうボランティア活動からのスタートでしたので、金銭的なことは二の次に考えられていたのです。

しかし、日を追うごとに活動も次第に発展していき、当然のこととして、会の経費の問題が出てきました。会員には迷惑をかけられませんし、とりあえずは、今良六、尾山清からの寄付金をこれに当てていました。

会員の加入、脱退は随意であり、「来る者は拒まず、去る者は追わず」という、誠に自由奔放とも言えるものでした。会員の募集などもしたことがありませんでしたし、同志会活動に共鳴し、進んで加入するという、真の同志の集まりでした。

ちなみに同志会員の中から脱退者は無く、大きな行事の時には、男女合わせて百人程度の動員力がありました。

同志会結成時に、当時、新地町にあった劇場で、決起大会を開きました。大会では五人の幹部会員が、それぞれ古平町の復興を呼びかけました。

一、古平推進同志会発足について　近藤　雪一
二、古平町を愛する　岩崎　倉治
三、青年に告ぐ　尾山　清
四、古平町復興のために　今　良六
五、同志会活動に魅力を感じて　熊木　良吉

会場は、早々と詰めかける町民で満員となりました。大会の時間は、二時間三十分でした。素人弁士の演説に飽きてしまって、途中、退席者の出ることが心配されましたが、とつ弁ながら郷土の復興に夢を求め、明日への希望を訴える真剣さに打たれてか、一人として席を立つ人はおりませんでした。今後の会の活動に対して、大いに責任を感じたものでした。

高野素十句碑

昭和二十九年七月
水見句丈　建立

高野素十（すじゅう）は本名を與巳（よしみ）と言い、法医学が専門で、新潟医大の教授や学長を勤めた優れた学者です。俳句の方でも、有名な虚子の門下として、昔で言う四天王の一人と言われる実力者でした。

今から四十年ほど前の昭和二十七年夏、素十は題材を求めて古平を訪れたことがあります。その時、素十をよく知っていて、誌友でもあった水見句丈さんが、ちょうど古平小学校七十七周年記念の年であったことから、母校の思い出になる一句をと願って詠んでもらったのがこの句です。

ふるさとを同うしたる
秋天下　素十

その後、昭和二十九年に古平町開基八十五周年記念を期に、それを句碑として同校の校庭（現在の文化会館前庭）に建てたものであって、素十の句碑としては全国で初めてのものでした。

素十は、この句が大変気に入ったと見えて、色紙など書く時はこの句をよく書いたそうです。最近出た『素十俳句365日』という本の中の、十月八日のところに出ています。この句のモデルは絶対古平だと、句丈さんは力説しています。

「後志状況報文」―明治三十二年―

二十世紀初めの《古平郡》

沢江村（沢江町）

▼地理＝東は、歌棄・沖村の二村と余市郡山道村に続いていて西南の二方は、古平川で古平市街と境界になっている。北は海に面しているが狭く、南になるにしたがって広くなり、ちょうど袋状になっている。東側は山が連なり、西側は次第に低く、古平川は山麓を削って所々に狭い平地があるが、地味が悪く農耕には適さない。

海岸は低く、砂浜である。川岸の樹木はヤナギ、カバなどが多く、山に入るとカバ、ナラ、ボダイジュなどがまばらに生えているが、二、三里奥に入るとやや木が密生している。

▼運輸・交通＝古平市街とは古平川を隔てているだけで、古平湾に面していて便利の良いところである。

▼沿革＝昔はアイヌの部落で、アイヌ語で「メナシトマリ」と言い、「東風の時に、風をよけるに良い澗」という意味である

漁場請負人の番屋、板倉などがあり、また、出稼ぎに来ている漁民の家が十三戸ある。

明治の始めころから移住して来る者が次第に増え、同五年ころには沢江村と改めた。そのころから目立って永住する者が増え、その後も永住者が増え続けて、同十三年ころには、海岸付近に漁家が並ぶようになった。

イヌは、明治の始めころ悪疫が流行して死亡する者が多く、その数が急に減ってしまった。和人の移住して来る者が増えるにしたがって、離散する者や病気で死ぬ者があって、今はわずかに数戸を残すだけである。

▼戸数と人口＝明治三十二年末現在の戸数は百四戸、人口は六百六十二人で、青森・新潟・石川の三県から移住して来た者が多い。アイヌは五戸、十余人である。昔、出稼ぎに来て、永住している者が七戸ある。

▼部落＝人家は古平川東岸と海岸に並んでいて、市外の形をし巡査駐在所、旅人宿、小売業の商店などがある。（つづく）

【今日はこんな日】

納税貯蓄組合が町内の全地域に結成される

［昭和39年］

大正九年、時の町長が各戸にこんな文書を配りました。

「鰊が大漁で、金回りがいいからといって無駄づかいをしないように。また、お金は多少にかかわらず蓄積して、生産の元手にし、生活の安定を図ることが大切である。」（一部を抜粋）

町の財政は、鰊漁に依存することが大変大きく、いったん不漁になると税金が滞り、大漁だと有頂天になってパァーと使ってしまい、収税率の悪いのが悩みのタネでした。

この傾向は戦後になっても変わらず、納税についてはアノ手コノ手と、知恵をしぼっては手を尽くして来ました。

昭和の初めには、漁の具合を見て役場吏員が出かけて行き、報奨金制度も作りました。

戦後間もないころにも、一時期、各家庭に出かけて行ったことがありましたが、人手がかかり過ぎることから取り止めになり、納税に来た人には窓口でタオル一本を、納期が遅れて来た人にも石けん一個を渡したりしたこともありました。

そのころ各地で、根本から納税の仕方を変えようということで、納税貯蓄組合がつくられるようになりました。

古平町でも積極的に奨励し、昭和二十八年八月、群来村納税貯蓄組合（組合長木村吉郎・組合員二十一人）が最初にでき、その後、町内でも次第に組合ができて、昭和三十五年、組合数三十六・組合員八百八十人に達したところで、納税貯蓄組合連合会を結成しました。

そして昭和三十九年十一月、全町内に納税貯蓄組合がつくられ、組合数五十九・組合員千五百七人になりました。そして古平町納税貯蓄組合結成記念式が行われたのです。